

中国工業合作運動について

—— レウィ・アレー、盧広綿両氏に聞く ——

きく ち かず たか
菊 池 一 隆

まえがき

I レウィ・アレー氏との対談

II 盧広綿氏との対談

ま え が き

中国工業合作運動（以下、「工合」運動と略称する）とは、抗日戦争遂行のため1938年8月に開始された工業生産運動である。その目的は、戦禍によって生み出された多数の難民、失業者を吸収し、労働力、生産力に変え、抗日持久戦を貫徹するための経済的基盤を育成することにあった。当時、上海、無錫、天津等の工業集中地帯が日本軍により次々と占領されたため、中国は緊急な経済再建に迫られていた。国民政府は急遽、工場の奥地移転を決定するとともに、その補強策として、小規模工場を中国各地に大量に群生させる「工合」運動を追認した。一方共産党も工業合作社（以下、「工合」と略称する）の民主的方向性、物資供給力と「工合」に対する国際的な高い評価をみてこれに支持を与えた。

「工合」は、戦時体制に適応するため全国を三つの経済防衛線に区分し、それぞれに適合する3種類の生産形態を採用した。第1の前線、ゲリラ地区の「工合」は「工業ゲリラ軍」とも称され、生産工具も比較的軽便で携帯に便利なものを有し、遊撃隊、正規軍とともに自由に移動する。第2の、戦区と大後方の中間地帯に設立される中型「工合」は、半手工・半機械で生産を行なう。第3の大後方に設立される大型「工合」は比較的大規模で、かつ近代化した機械を使用して大量生産を行なうというものである。これら「工合」は、空襲の危険を避けるために分散化され、また運輸網未発達なことも考慮されて、原料供給地の近くに設立された。こうして工作区域は全国17省に及び、『解放日報』の記事によれば、41年8月には1700社、社員数3万5000人を数えたという(注1)。生産品は軍需品、日常必需品など百数十種にのぼり、強力

に抗戦を支持した。「工合」は物資不足に悩むゲリラ地区の軍隊や民衆などのもっとも緊急な需要にも応じていたから、その生産品のもつ意味は特に大きいものであった。しかし、1941年後半から「工合」は国共対立や資金不足、インフレのため、次第に停滞、減少する傾向を見せ、抗日戦終了の1945年には423社を残すのみとなった。

「工合」の特徴は、民衆運動の性格を有するとともに、「生産者の経営参加」などの徹底した工場内民主化路線にある。その上、「工合」の社員は、広く周辺民衆への啓蒙や宣伝を行ない、奥地民主化の基礎を築き、また同時に、近代的病院、学校、技術訓練班などを創設し、地方民衆の生活改善にも尽力したのである。抗日時期にあって、「工合」は計画されたほどには増設されなかったとは言え、反ファシヨ統一戦線の一環として機能する一方、新しい理念を掲げた民衆運動として多くの人々の心をとらえ、国際的評価も高く、多方面に大きな影響を及ぼした。

本稿でその談話を紹介するレウィ・アレー (Rewi Alley)氏は「工合」の事実上の創始者と目される人物であり、盧広綿氏は有力な指導者である。会見は、1979年10月2日と4日の両日、北京で行なわれた。両日とも午前中はレウィ・アレー氏に、午後は盧氏にというあわただしスケジュールであったが、長時間にわたって「工合」運動についての詳しい説明と貴重な体験談、意見をうかがうことができた。アレー氏は82歳、盧氏は73歳という高齢であるが、しかしきわめて壮健であり、理想主義的姿勢と情熱の衰えを知らぬ話しぶりには深い敬意と感銘を覚えた。

ここでアレー氏と盧氏の経歴を簡単に紹介しよう。

レウィ・アレー氏は1897年12月2日、ニュージーランドのカンタベリーで生まれる。レウィという名は、1860年代にイギリスの侵略者(Red Coats)に抵抗して、独立

のために闘ったマオリ人酋長レウィ・マニポトにちなんで名付けられたのだという。開拓者で教師でもあった彼の父フレデリック・アレーは、農業協同組合の支持者であった。合作事業に対する考えは、その父の影響を受けたのかもしれない。第1次世界大戦にはイギリスの呼びかけに応じて、カンタベリー歩兵連隊に入隊し、フランスに行く。時に18歳であった。戦争の体験からその無意味さを悟り、反戦論者になったという。1919年、ニュージーランドに戻り、牧羊業に従事する。6年後、シドニーに渡り、肥料工場で働いた。その間に無線電気を学び、貨物船カルル号に乗り込み、五四運動後の中国の動向に対する関心から中国を目指した。上海に着いたのは1927年4月21日のことである。まず、上海市消防局に勤務したが、工部局工業司が創設されると、その工場監督官となった。こうして1933年から38年まで上海4700余の工場を視察し、労働者に対する虐待、過重労働と労働者の栄養不良等の状況を知った。特に、製糸工場において8、9歳の幼年工が12時間も立ち続けて労働している状況は、彼に深い衝撃を与えた。こうした経験が、「工合」運動の中で工場内民主化、労働条件の改善等を強調させる契機になったと考えられる。現在の中国のアレー氏に対する評価は、その80歳の誕生日に際して鄧小平が行なった挨拶からも十分うかがい知ることができるであろう。「アレー同志は（中国が）辛酸をなめていた時期にも、われわれが革命事業のために戦っていた時期にも、さらにはわれわれが勝利した後においても、50年来変わることなく、中国人民のために多大の仕事をしてくれた。」^(注2)

盧広綿氏は1905年に東北で生まれた。北京大学で化学を専攻し、28年に卒業した。翌年春、日本を訪問し、賀川豊彦、大山郁夫等に会い、その影響を受ける。30年から32年までスコットランド、デンマークに留学し、経済学や協同組合論を学ぶ。帰国後、燕京大学（アメリカ系ミッションスクール）の学生公益委員会の会長に任じられた。その時期、イギリスの協同組合論者J・B・テラーに会う機会を得たことが、彼をして河北省の深沢や東鹿などの綿産地で綿花運搬販売合作社を組織させる契機となった。「工合」運動が開始されると、合作社に対する指導力や組織者としての手腕がかわれ、「工合」協会組織組長、および「工合」運動がもっとも発展した西北弁事処主任を兼務するようになる。アレー氏の片腕的存在である。現在、全国総社科学技術局で実践的研究を行っている。

両氏に対する質問は、日本で入手し得る史料（たとえば、『大公報』香港版、重慶版、『新華日報』、『解放日報』などの華字新聞、『The China Weekly Review』、『China Today』などの英字雑誌、『情報』『東亜』『特調班月報』等々の邦文資料を中心に、レウィ・アレー氏自身の著作^(注3)、N・ウェールズ、張法祖、謝君哲、E・スノー、W・パーチェット、刈屋久太郎、鹿地亘等の各著作）からだけでは、どうしても理解できない点に集中するように努めた。質問点を列挙すれば以下のとおりである。

(1)「工合」初期思想の形成、(2)辺区と「工合」、(3)国民政府と「工合」、(4)中間勢力と「工合」、(5)国共内戦期の「工合」、(6)解放後の中国と「工合」、(7)その他。そして、それをそれぞれ4～8の小質問で構成した。若干補足すれば、その趣旨と狙いは以下の諸点にあった。

(a)「工合」は本来アレー氏を中心に中国の実業界、文化界の民間有志によって自発的に計画されたといわれるが、創始期の詳細な事情と「工合」協会の人選について。それらは「工合」運動や「工合」協会の性格を考察するうえで不可欠であり、運動の方向性つまり社会主義なのか改良主義なのか、を考察する際の資料となる。(b)「工合」開始の場所として、陝西省宝鶏（国民党地区）が軍事的経済的安全性から選ばれたといわれてきたが、それは具体的にいかなる意味を内包しているのか。「工合」が民族統一戦線として機能を果たした要因と、宝鶏の地理的位置となんらかの関連があったのではないかと。(c)さらに深く民族統一戦線としての「工合」を分析するために、共産党と国民党の対応の仕方を数多くの事実によって明らかにする必要があった。同じ意味から中間派と「工合」の関係を知ることは重要と考えた。(d)アレー氏が技術顧問を解雇された時の具体的な状況は、「工合」協会の性格の変化を知る上で重要な手がかりとなるであろうし、また盧氏の1942年以降の足跡を知ることは、当時の「工合」が置かれていた状況を把握する上で必要であった。(e)内戦期の「工合」については史料が皆無に等しく、基礎的事実を聞くことから始めねばならなかった。(f)「工合」が解放後の中国に対していかなる貢献をしたかについて、一般的に山丹学校の貢献と協同組合式企業の実用性を示したといわれてきたが、具体的に「工合」が現在の中国とどのような形で結びついていったのかは、山丹学校を除けばほとんど明らかにされていなかった。また、他の点に関しても日本にある史料で一応概観しえても、具体性に欠けるものが多く、特に1938年、39年、40年、

41年の史料が比較的多いの対して、「工合」が衰退し始める42年以降、史料が激減してしまう感みがあった。以上の点を考慮して、両氏への質問を行なった。

対談は、上記の質問事項に予め目を通しておいていただきそれに対する事実、見解をうかがい、さらに質問を重ねるといった方法をとった。質問の趣旨がうまく伝わらず、質問と答が食い違ったり、話題が途中からそれてしまった場合もあるが、そのまま採録した。また、重複する話の場合も完全に重複したもの以外はすべて収録した。なお、アレー氏は最初の話英語で個別の質問に対しては中国語で答え、盧広綿氏も英語がきわめて得意で、時には英語だけで話している。また、盧氏との会見には、テープにうまく録音されていない部分もあるが、そういう箇所は潘金声先生（北京大学日本語科主任教授）が、簡潔に通訳してくださった内容のメモに依拠している。その結果、実際の話よりも幾分短くなっている。また、時間的制約から納得いくまで質問できなかった箇所もあるが、やむをえないことである。

以下の会見記の中で使用している（ ）は、内容をより理解しやすくすることなどを考慮して筆者が補ったものである。また敬称（たとえば毛沢東主席、周恩来同志などの敬称）は盧氏がアレー氏に使う場合と手紙文を除いて、原則として省略した。

なお、人物に対する注は、龍雲、李維城などを例外とすれば、主に「工合」直接関係者か否かを基準につけている。直接関係者にもかかわらず、注のない人物は資料不足の結果である。

（注1） 田家英「抗戦中の工業合作運動」(『解放日報』1941年12月9日)。

（注2）『北京周報』50号 1977年12月13日 55ページ。

（注3）アレー氏の著作には、*Leaves From a Sandan Notebook*, 1950; *Yo Banfa*, 1955（邦訳小野田耕三郎、都留信夫訳『道なきにあらず』ありえず書房 1975年）; *The People Have Strength*, 1954; *Sandan, an Adventure in Creative Education*, 1959; *China's Hinterland*, 1961; *Amongst Hills and Stream of Hunan*, 1963; *Fruition*, 1967; 詩集 *Snow over The Pine*, 1977などがある。

また、アレーの伝記としては、鹿地亘『砂漠の聖者』弘文堂 1961年と Airey, Willis, *A Learner in China: A Life of Rewi Alley*, 1970がある。その他、彼について触れている本としては、N・ウェールズ著、東亜研

究所訳『支那民主主義建設』1942年、E・スノー著、森谷巖訳『アジアの戦争』みすず書房 1956年、王安ナ著、篠原正瑛訳『革命中国に嫁いで』平凡社 1975年、W・バーチェット著、杉山市平訳『中国——生活の質』筑摩書房 1975年、等がある。

I レウィ・アレー氏との対談

ここで語られている内容は、あらかじめ提出した質問に対してのアレー氏の回答である。質問の主なものは、(1)「工合」にはフォード自動車会社出身の技術者が多かったが、「工合」と同会社との間に資金、技術面などで結びつきがあったかどうか、(2)スカンジナビア諸国などでも工業分散化を鼓吹していたが、「工合」のそれとの相違はなにか、(3)抗戦期の「工合」の主要な役割、(4)アメリカの「工合」支持の背景、(5)国民政府の「工合」支持の背景、(6)八路军、新四軍と「工合」の関係、(7)山丹学校の学生達の具体的就職先、(8)「工合」の中で大工場や人民公社の工業部門に発展したものがあつた場合、その具体的事実、(9)現代に通じる「工合」の意味等であつた。

「工合」そのものとフォード自動車会社との間に実質的關係はない。確かに、個人的には西南地方の「工合」指導者林福裕(注1)などが、アメリカのフォード自動車社で訓練された。私の知っている限りでは、西南地方の湖南、広西、雲南等の「工合」で、彼が働いたという関係があるだけだ。また、北欧、スカンジナビア諸国の合作運動は中間的運動で、それとも「工合」は無関係だ。本来、「工合」は中国の占領されていない地域で人民を組織して、抗日戦争を行なうためのものであつた。そして、「工合」は蒋介石を戦う側に立たせ続ける役割を担っていた。これが、「工合」の根本的意味である。

私は今なお、全中国の小規模工場を「工合」に組織することは意味があると考えている。だが、当時は特に重要であつた。当時、それは国民政府にとっては、外国の物資援助、特にアメリカの資金援助を得るための民衆組織であつた。アメリカは石油を自国のために使用せず、日本軍がアメリカから石油と鉄屑を輸入し、日本に運んでいた。このような利敵行為に対して、アメリカ国内での非難は高まっていた。そうした状況の中で、「工合」はエレノア・ルーズベルト(F・ルーズベルト夫人)に支持された事業の一つであつた。また、アメリカの上流階級からの支援も受けることができた。このことは、国民党に影響を及ぼさずにはおかなかつた。そこで、国

民党は「工合」に支持を与え、しばらくの間それを発展させた。だからといって、国民党が本質的に「工合」を好んでいたわけではない。地主も軍国主義者も「工合」を好きではなかった。雲南省に「工合」を設立した時、地主たちは雲南省昆明で会合した。彼らは口ぐちに「大変だ！大変だ！共産党がきた！」と大騒ぎした。いまや、われわれは経営者なき工場を所有している。このことは地主たちにとって恐怖であった。したがって、われわれは官僚、地主、軍国主義者等から激しい反対を受けたが、アメリカから中国にやってきた反戦グループのおかげで、「工合」を存続させることができたのだ。

「工合」開始の時の話をしよう。「工合」の理念は世界的に見ても新しいものであった。インドで相当数に達していた工業の協同組合(註2)を例外とすれば、多くの国家に多種類の協同組合が存在していたが、工業の協同組合はなかった。「工合」についてわれわれはスノーと上海で話合った。その結果、現在なすべきことは、工業の合作社を組織することにあるとの結論に達した。八路軍は工業の合作社を欲していた。当時、八路軍、新四軍は工業の合作社を始めようとしていたが、激しい戦闘を行なっている最中であり、実現できなかった。そこで、われわれはこのアイデアを採用し、私が計画を立て、それを実行に移したというわけだ。あなた方にとって、40年も昔の中国の状況を理解することは難しい。それは、た易いことではないだろう。というのは、事態が変わってしまい、現在とは異なっているから……。

「工合」は民衆運動であった。当初、「工合」は大成功をおさめることができた。民衆が「工合」を好んでいたからだ。中国の民衆は協同性という天分を持っていた。実際、それだけは本当に恵まれていた。だが、当然のことではあるが、国民党は民衆のそうした性質をまったく理解していなかった。国民党は私に次のように言った。「あなたは、工業を指導することはできるだろう。しかし、もしあなたが、民衆に彼ら自身で運営できる工場を与えたならば、あなたは工業界を統制できなくなるのだ」と。こうした理由をあげて、国民党は「工合」に反対した。私の言うとおりにやれば、国民党は工業界を十分に支配することができなくなる、と考えていたのだ。そして、それが彼らにとって重大問題であったのだ。

「工合」が発展するにつれ、国民党は一方で諸外国に対し面子をたてるため、表面的には「工合」の発展を要求しながら、他方ではその発展を阻止しようとした。それで、われわれは多くの難問に直面することになった。

結局、私は行政院を追い出された(後述 98, 100ページ参照)。

私は学校を設立するために甘粛省へ向った。甘粛省の学校は「工合」の一部である。われわれ、「工合」をよりよく運営することができる幹部を養成しようとしたのだ。幹部養成は大成功であった。解放後、政府は非常に多くの、本当に非常に多くの幹部を必要とした。その要求に見事に応えたのだ。山丹学校は国立となり、石油管理のために人民政府に受け継がれた。そして、現在、当時の学生たちは全国のあらゆる油田で働いている。彼らの多くは党の書記となっており、いく人かは技術者となっている。彼らは皆、昔は普通の農家の子弟であった。彼らは本当によく頑張った。いまなお、われわれの学校は蘭州にある。蘭州に行けば、それを参観することができる。その校名は蘭州石油技術学校だ。私はいまもその学校の名誉校長だ。時どき出かけていっては演説をしてくる。

「工合」は、現在かなりの関心もたれ始めている。確かに、解放後20年のうちに……人びとが「工合」に理解を示さなかったために、解放後あまり経ない間に「工合」は姿を消してしまった。しかし、現在再び復活してきた。もしも、あなたが武漢に行くことがあれば、そこで八路軍博物館を見ることができる。そこには、「工合」を始めた頃の資料が多くはないがある。そこは、一般に「八弁」(Baban)、すなわち八路軍弁事処と呼ばれ、武漢の旧日本租界にある。全国各地の当時の「工合」社員は、現在無数のオーガナイザーとなっており、また当時の「工合」は大工場となっている。

抗戦時期、宝鶏には西北弁事処があった。最初の「工合」の根拠地として宝鶏を選んだ理由は、最初延安に行くことができなかったからだ。われわれは国民党支配地区の非常に小さな都市、隴海鉄道の終点のちっげな町である宝鶏に行かねばならなかった。しかし、われわれはこの地を「工合」開始の絶好の場所と考えた。こうして、「工合」は宝鶏で創業されたのだ。「工合」は西北全域に広がり、延安、辺境にまで拡大した。延安の民衆は「工合」を運営し始めた。私は延安、綏徳、榆林などで二冬過ごした。地方の「工合」で働くことが多くなったのだ。民衆は全国各地で「工合」を開始した。民衆は必ずしもそれを「工合」とは呼ばない。時には、「工廠」と呼ぶこともあった。当時は戦争中でもあり、「工廠」という言葉には、神秘的な響き、魔力があった。なぜならば、民衆は以前工場というものを持ったことがなかつ

たから。

そして事件が起きた。山丹学校は「工合」の一部であった。「工合」は後援者がいる場合のみ、活動できた。孔祥熙は国民党の首脳であり、「工合」の理事長でもあった。そのため、あらゆることについて、彼の承認を受けねばならなかった。さもないと、地方での活動はできなかった。1942年、私は行政院を首にされたが、その後も孔とはいつも各種の問題について忌憚なく話合った。その時、私は「工合」の国際委員会主席の地位に留っていた。

私は何人かの日本人を知っている。日本で彼らは小さな「工合」運動を始めた。彼らは、私のところに幾つかの資料を送って寄こした。今朝、それを見つけないことができなかった。捜してみたがわからなかった。しかし、日本で「工合」運動を行なうことは非常に難しい。なぜならば、産業構造があまりにも組織化されすぎているから。

私見を言えば、「工合」は過度の上部機構を除いた一種の協同作業場であると考えている。たとえば、小工場があったとして、もし経営者がおり、その他の多くの上部機構が存在したとしたら、利益は消滅してしまう。しかし、もし1グループの民衆が共に働いて、利益を分配したならば、経営はかなりうまくいく。その上、彼らは剰余金を得ることができる。その剰余金を共同資金、あるいは資本とすることができるし、また共同資金や資本を増大させることもできる。そして、税金を納めることができ、その他の支払いにも応じられる。都市、地方、農村などの小工場、小人数工場に、合作制度を適用することについては、意見の不一致がある。もちろん、大工場は国営である。そして、国家は主な財源を大工場に求めねばならない。しかし、小工場があり、人民公社も1工場から数工場を経営している。当然、人民公社は資金を必要としている。そこで、人民公社は工業を手がけることで資金をつくり、それで学校、病院などを運営しているのだ。だが、工業面から言えば、それだけで十分なわけではない。小さい仕事、すなわち全国には小さな工場で行なった方が有利な仕事がある。そのため、小規模な合作工業は、現在もなお大きな将来性をもっているといえる。

現在、われわれの学校は地方工業のための技術者や石油のパイプライン敷設のための技術者を養成している。なぜならば、中国の石油のパイプラインは非常に長い。新疆から甘肅までであり、非常に長い。そこで、とりわけ複雑な仕事にもなる。こうしたことを考慮しながら、われわれの学校は石油のパイプラインのための技術者を

養成しているのだ。

現在、工業の合作社はどこにでもあるというわけではないが、上海、北京等の地区委員会や民衆が10人ないし12人の小人数からなる小規模「工合」を運営している。

抗戦中、「工合」は7人が最小単位であった。「工合」の社員数の平均は30人から40人で、その規模がもっとも活動に適していた。私は長期間、東南区の贛^ン県で指導を行なったことがある。そこには、700社以上の「工合」が存在していた。八路军を支援するために八路军内に「工合」を組織したように、東南区では新四軍の中に「工合」を組織した。福建や広東にあった「工合」のいくつかは、現在大工場になっている。先日、その一つを視察したが、そこでは5トンのトラックが製造されており、2000人の労働者が働いていた。さらに、私が行ったもう一つの工場は3000人の労働者を擁しており、エア・コンプレッサーを生産していた。それらの工場には、昔の「工合」時代の旋盤が展示されていた。

そうだね。いまや状況は違っている。1980年だから。もうすぐ、1980年だからね。1938、1939年……は抗日戦争時期であり、現在は社会主義の時代だから。

1. レウィ・アレー氏に対する質問

——「工合」理論の形成に影響を受けた理論はありますか。

影響された理論はない。「工合」をやるようになった契機は、1937年にE・スノーが解放区から戻ってきて、「解放区の紅軍は工業の合作社をつくる気持をもっている。やりたがってはいるが、まだやっていない」という話をした。それなら方法を考えて、立派な理論をつくって、実行に移してみようということになった。

——N・ウェールズは「工合」運動を中間的運動と見なし、この運動に合作国家への展望を見出したが、アレーさんの見解をもう一度お聞かせ下さい。

N・ウェールズは「工合」を完全には理解していない。彼女は「工合」運動を始めた初期の頃だけ理解していた。ウェールズはキリスト教などの影響を受け、誤った見方をした。

レイノルズは一つの論文を書いた。その中で国民党の人が彼に次のように言ったと書いている。すなわち、「国民党の蔣延黻たちは『工合』を河北省の高陽でかつて行なわれた合作実験と同じだとする見方をとっている」と。しかし、それは間違いだ。それは労働者によって組織されたものではなく、いく人かの工場経営者たちが合作し

て、天津などの大紡績工場に対抗するために、つくられたものである。

——辺区の「工合」と重慶政府治下の「工合」を比較して、「工合」それ自体の組織、経営等の内的差異は存在しましたか。

たいした違いはない。同じように労働者を雇う。賃金を上げる。管轄区の分配等々やり方はほぼ同じだ。

しかし、辺区の「工合」は、国民党の影響がないからすぐ組織することができる。「工合」をつくるのが、容易であった。労働者、資金、材料、技術がありさえすれば、すぐに「工合」を組織することができた。そのため、発展は非常に速かった。延安ばかりでなく、すべての解放区、たとえば五台山、太行山など八路軍のいるところでは、かなり発展した。

国民党地区では、「工合」を設置している場所に国民党の特務がすぐに捜査にやってくる。「悪い組織」と疑っているからだ。そして妨害する。指導者を連行する。私が江西省で「工合」を組織した際、ある指導者は立派な人間であったにもかかわらず、連行され、撲殺された。

——「工合」は辺区の生産合作社にどのような影響を与えたのでしょうか。また、「工合」は辺区に対して、どのような援助を行なったのですか。

われわれはよく辺区の生産合作社に様子を見にいき、指導してやった。また、太行山の「工合」の指導者(註3)は、もと宝鶏事務所幹部の一人であった。宝鶏にいた時、国民党が彼を殺害しようとしたので、(八路軍地区の)太行山に行なった。そこで、宝鶏にいた時の経験を生かして「工合」を組織し、運営した。

当時、国共摩擦があり、「工合」は時に政治紛争にまきこまれた。たとえば、われわれは榆林から羊毛を買って、宝鶏で軍用毛布をつくった。結局、八路軍がそれを買った。八路軍のところに軍用毛布がなかったからだ。それを西安に送って、八路軍はそれで装備して国民党と戦った。つまるところ、1941年以降、八路軍への物的援は「工合」運動によって行なわれたといえる。なぜならば、1941年太平洋戦争勃発以前は、外国からの献金を、香港、上海経由で延安に送ることができた。だが、その後は困難になったからだ。でも、辺区はよく「工合」を手伝ってくれたのだから、われわれも当然のことをしたままだ。

抗日戦争終結後、「工合」協会を重慶から上海に移した。その時、新四軍の代表が上海に来て基金を持って帰った。こうして「工合」は新四軍を援助した。

——なぜ、辺区では他の合作社に反対していた地主、商人が「工合」には積極的に参加したのですか。

辺区の地主、商人は「工合」に積極的に参加するよりほか、他に方法がなかったのだ。なぜならば、辺区の幹部は彼らの行動にいつも注意を払っており、地主、商人が商売することに干渉はしないが、「工合」を妨害することは絶対に許さないとの態度を明確にしていた。

過去に国民党が行っていた合作社は、完全に欺瞞的なものであった。なぜならば、彼らのやり方は、合作社を組織する際、県に若干の金を出させ、地主をその責任者とする。しかし、地主は実際には合作活動をせず、これらの金で商売を行なう。たとえば、灯油を売買する。われわれが江西で初めて「工合」をやろうとした時、民衆は灯油合作社と同じものではないか、と考えて懐疑的であった。灯油合作社では、地主が人びとの名前を適当に社員名簿に書き入れるが、それらの人びとは全く実務に関与せず、社員になっていることすら知らなかった。金を儲けると、地主は自分のふところに金を入れる。しかし、赤字の時は県の役人がやってきて、民衆に赤字分の金を分担させる。民衆は子供、娘を売ってまで、これらの金を県に支払わねばならなかった。

当時、地主、商人の話をよく聞いた。たとえば、雲南、貴州の「工合」弁事処は昆明にあった。地主、商人が二省の各地方からやってきて、「管理者も、経営者もない。大変だ！大変だ！共産党だ！」と騒ぎたてた。そんな時、貴州、雲南の軍閥龍雲(註4)が集会を開催してくれた。そこで私は演説し、「工合」の意義について説明した。

——「工合」運動が自主的運動として続行しえたのは、なぜだと考えますか。

民衆は共同組織で一緒に働くことが好きだ。こうした理由で、民衆は「工合」を非常に愛した。彼らは協力して作業を行なうことを喜んでいて。経済的理由ももちろんある。「工合」各社の中には、経営がうまくいっている社とそうでない社があった。これは、銀行が貸付をしてくれるか否かと、その利息額によって決定された。西北区の場合には、「工合」金庫(註5)から借りることができたため、うまくいった。辺区でも同じことをやっていた。

——1942年、アレーさんは行政院の地位を奪われたと言いましたが、それは「工合」協会の技術顧問の地位を追われたという意味なのですか。その際、蔣で圧力をかけたのは誰ですか。劉広沛(註6)と考

えてよいのでしょうか。

私が行政院を首にされたのは、中国が太平洋戦争に参戦した後だ。その時、国民政府はアメリカに頼ることにした。アメリカからの資金を欲していたのだ。それはあまり現実的発想とは言えなかったが。この時、アメリカは「工合」運動に圧力をかけた(注7)。行政院はアメリカ人ジョージ・フィッチ(George Fitch)(注8)を連れてきて、私の地位につけた。私がある事柄で密告されたことが、決定的であった。密告の内容は、私が共産党を支援したことと、毛沢東の命を受けて洛陽で八路軍と接触した、ということであった。なぜ接触したかといえば、賀竜の手伝いをするためであった。われわれは資金を受けとって手榴弾、武器を製造した。また、太行山合作社に対しても援助を行なった。

この時、劉広沛は重慶にいた。劉広沛も密告に加担したが、むしろ密告に積極的だったのは、ある東北出身の男で、八路軍を裏切った洛陽弁事処の人物である(注9)。

孔祥熙はフィッチではなく、周象賢(注10)を行政院に入れることを望んでいた。周は蒋介石の策士であった。

私の行政院での地位は技術顧問だ。「工合」協会の技術顧問と同じ意味だ。なぜなら、「工合」協会は行政院の一部門だからだ。「工合」協会がなぜ行政院に所属したかといえば、行政院の命令がないと各地にいけなかったのだ。各省に行くと、灯油合作社などの人が、おまえはどこの人間だと聞くと、仕事の邪魔をするからだ。

——なぜ、最初に「工合」は西南ではなく西北を指向したのですか。なぜ、宝鶏を「工合」開始の絶好の場所と考えたのでしょうか。

当時、西北の状況は不安定で、日本軍がいつ宝鶏まで進軍してくるかわからない状況にあった。こうした理由から、西北地方はすべて遊撃区となる可能性があった。われわれ宝鶏に事務所を設け、陝西、甘肅、河南すべてを管轄下に置くとともに、延安とも連絡がとれると考えた。

かつて武漢の八路軍弁事処の人(注11)が次のように言った。「あなたの第1の任務は蒋介石と妥協しないことだ。武漢、蘭州にある工場を西北に移すべきだ」と。そこで、私は武漢の64の工場を西安や宝鶏に移した。われわれ自身の目的は解放区を手伝うことにあった。手伝えるだけ手伝いたいと思った。宝鶏に事務所を設ければ、延安を手伝うことができる。江西に事務所を設ければ、新四軍を手伝うことができる。しかし、西北弁事処(注12)の次に、西南弁事処を設立しなければならぬと考えた。なぜな

らば、重慶政府の人が文句を言うからだ。そうした事態を招くことはよくない。だから、西南弁事処つまり、湖南、広西、貴州、雲南等に先に事務所を設けてから、東南の江西、広東、福建にも事務所をつくり、さらに浙江、安徽にもそれを設立すればよいと考えた。そうすれば、後で新四軍を手伝うことができる。

——なぜ、山丹学校をつくったのですか(注13)。

当時、最大の困難は人材不足だ。これは、国民党が実際に必要としていることをやらなかったことに起因している。われわれは重慶の指導者たちに「工合」を組織すると同時に、人材も養成していることを見せてやらねばならない。そのために、「工合」の名の下に学校を設立する必要があった。私は山丹学校設立後、「工合」にとって必要な人材を訓練した。国民党による訓練はまったく現実的でなかった。

——宋慶齡ら中間勢力の人々は、「工合」に対してどのような考え方をもち、いかなる活動をしたのですか。

宋慶齡は最初から最後まで多方面で手伝ってくれた。そればかりでなく、宋子文にまで影響を与え、江西などの「工合」を援助してくれた。「工合」運動の初期には、8万元のカンパもしてくれた。その他にも、香港「工合」促進社の名誉主席にもなっている。また、重慶に戻った後、各地の「工合」、たとえば成都の「工合」を視察してくれたりもした。

——一般工場の労働者もしくは労働運動と、「工合」は直接、接触したり、共同歩調をとったりしたことがありますか。

当時、工場はあまり多くなかった。だから、彼らは彼ら独自にやり、われわれも独自にやった。

——国共内戦期を通じて、「工合」協会は存在していましたか。もし、存在しているとしたら、どのような機能し、どのような役割を担っていたのですか。また、この時期の総幹事は誰かをお教え下さい。

「工合」協会は存在していた。解放後の1950年から51年までであった。内戦期はずっと上海にあり、その後北京に移り、国際工業合作協会と名称を変えた。しばらくして委員会を開催して、それを解散し、合作社総社となった。

「工合」は内戦期も役立った。当時、難民が非常に多かった。また、経済も狂っており、貨幣が無価値になっていた。この時期、「工合」を運営して難民に仕事を与えることは大きな意味があった。この時期、上海に送られてきた外国からの献金の3分の1は山丹学校に、3分の1は「工

合」に、残る3分の1は新四軍に、というように分けた。

内戦期の総幹事は張福良である。彼は国民党系ではあるが、反動的でも進歩的でもなく、中間的思想の持ち主であった。無論、孔祥熙は自分のお気に入りには仕事を与えなかったのも、彼もその1人といえるだろう。張はキリスト教徒であり、現在、アメリカのケンタッキー大学教授になっている。副総幹事は孫……名前の方は忘れたが……孫といい、現在北京に住み、英語の医学雑誌の編集を行なっている。張がアメリカに亡命後、孫が代理総幹事になった。

——「工合」運動が解放以後の中国に与えた具体的影響についてお聞かせ下さい(注14)。

解放以後、合作運動は全国的運動になった。現在のことはよくわからない。盧広綿に聞けばよい。山丹学校は石油学校となった。いま、蘭州にあり、私はその学校の名誉校長だ。私が養子にしたもっとも大きな子供は、蘭州のわれわれの学校の副校長になっている。当時の山丹学校の生徒たちは、大慶などの全国の油田に散らばり、働いている。時に、私のところに集まってくる。

——工業の大規模化、工業の現代化が進行している中で、「工合」からの問題提起はなんだと考えますか。すなわち、現代に通じる「工合」の意味をお聞かせ下さい。

現在、四人組の影響で失業者が多いから、北京、上海で小規模合作工業を設けている。「工合」の理論でやれば労働者はなんら経歴を必要としないし、上からの干渉を受けることがないし、やりやすい。

——当時、共産党、国民党、中間勢力、華洋義賑会、日本等が、それぞれの立場で中国に合作社を創設しましたが、中国人民は合作社を受け入れる素地が他国よりあった、と考えてよいのでしょうか？ また、そのような素地は、どのようにして形成されたのだと考えますか。

もちろんだ。素地はある。中国では昔から団体で仕事をする習慣があり、西洋の個人主義とは異なる。中国では大家族でも小家族でも一緒に仕事をするのが、一般的である。合作社を組織することは比較的簡単だ。

——現在、中国で「工合」はどのような評価を受けているのでしょうか。

いま、中国のある人々は「工合」の研究をしている。ある時期、ある人が「『工合』運動は反動的だ。外国の金をもらって、帝国主義の手先になっていた」と批判した。しかし、いまは違う。現在、「工合」運動は中国に

対して大きな貢献をした、と評価されている。いま、全国総社科学技術局で「工合」を研究している人々がいる。盧広綿もその1人だ。

——「工合」運動を回顧してもっとも強調したい点はどのようなことでしょうか。

印象がもっとも深いのは人間の団結である。いろいろな部門の人々が高山でも、農村でも、郊外でも、すべて「工合」によって団結した。いまでさえ、その影響は残っている。自力更生、共同で仕事をする——社会主義の精神とはそうしたものだ。

(注1) 林福裕はベイリーの弟子の1人で、ミシガン大学を卒業した。デトロイトで長期間、技術者として働いていたが、帰国して上海電力会社に勤める。1938年、彼は劉広沛とともに雲南省に赴き、「工合」の下工作を行なった。「工合」の開始後はまた湖南省に行き、当地の技術者を糾合するなど、西南区の「工合」運動の発展に貢献した。

なお、ジョセフ・ベイリー (Joseph Baili) は宣教師であるが、中国には布教以前の問題が山積していると考え、その問題打開の一環としてキリスト教関係の中国の青年たちを技術者として訓練すべく、アメリカのフォード自動車会社に送り込んだ。その弟子には「工合」運動に参加した者が少なくない。

(注2) ガンジーの紡車運動があった。また、木下半治「東洋に於ける協同組合運動概観」(『東亜』6巻11号 1933年11月) 94ページによれば、インドでもベンガルの織布工、鋳鐘工、製油労働者、製靴工、玩具工などの生産組合、ビハール、オリッサの織布工組合や漁民組合、パジェラートの織布工組合、マドラスの労働請負組合、土地閉墾組合、織布工組合等々生産組合が、かなり発展していた模様である。

(注3) 孟用潜を指すと考えられる。

(注4) 龍雲は軍閥で地方勢力の代表的人物であったが、抗日民族統一戦線を支持した。ことに国民政府の強引な中央集権政策に対抗するため、西南連合大学や民主同盟を積極的に支援するなど当時進歩的姿勢をとっていた。

(注5) 「工合」金庫は、「工合」独自の金融機関であるが、主に銀行が資金を「工合」各社に貸出す際の媒介的役割を果していた。「工合」金庫設立の結果、「工合」は郷村の奥深く浸透することが可能となり、銀行貸付の安全性を保証できるようになった。また、低利息、手続きの簡便化を実施するなど、「工合」の発展

に役立った。(『解放日報』1941年12月8日参照)

(注6) 劉広沛は東北生まれ。ペイリーの弟子の1人。アメリカのシンシナチ大学卒業後、一時フォード自動車社で働いた。奉天の東北大学工学院教授を振り出しに、遼寧国貨銀行經理、甘肅省建設庁長等の経歴をもつ。孔祥熙の信任も厚かったことから、「工合」協会の総幹事に就任した。当時は民主派であったが、後に反動化し、アレーの技術顧問の地位を奪うのに加担した。抗日戦後、東北の国連救済復興会議(UNRRA)の主任となったが、そこで私腹を肥したため逮捕された。国共内戦後、台湾に亡命した。

(注7) この事実は、いまのところ不明である。他の史料による裏づけができない。

(注8) ジョージ・フィッチは「工合」協会総幹事になる以前、重慶のYMCAにいたという事実しかわからない。

(注9) この人物の名前は昌延甫である。(鹿地前掲書 68ページ参照)

(注10) 『大公報』重慶版(1942年7月22日)によれば、1942年7月には周象賢が「工合」協会の総幹事になっている。つまり、総幹事の地位は劉広沛、ジョージ・フィッチ、周象賢という順で引き継がれたものと推測される。

(注11) 秦邦憲のこと(鹿地前掲書 51ページ参照)。

(注12) 西北弁事処は1938年8月に、西南弁事処は同年9月に、東南弁事処は同年10月に設立された。

(注13) 実は、山丹学校と辺区や国民党地区の「工合」とは、いかなる接触を保っていたのかという質問をしたつもりであった。

(注14) アレー氏は、「工合」運動を工人運動と始め聞き違えて、以下のように答えている。「労働組合の理論は、この何年か変動が非常に激しく、労働運動は回復したけれども、私はよく知らない。ここ2、3年は特に複雑である」と。

II 盧広綿氏との対談

盧広綿氏と会えたのはアレー氏の紹介による。盧氏は「工合」を語る際、忘れられない人物で、私は喜び勇んで北京の氏の自宅に向った。会談の主な内容は、(1)「工合」の資金、特に初期の資金について、(2)「工合」運動に対する盧氏の見解、特に「工合」の現在の中国に対する貢献について、(3)国民政府と「工合」、特

に「工合」協会の人選と国民党による「工合」弾圧について、(4)1942年以降の盧氏の活動状況についてなどであった。具体的に、かつ詳細にという私の願いは十分にはかなえられたと思っている。盧氏は、その話を自ら1., 2., 3.と項目をたてて進められたので、以下ではそれに従っている。(5)として収めた「『工合』の現在における有用性」は、雑談の際に盧氏が話されたものであるが、「工合」運動の分析のみならず、現在の中国を分析する際にも重要な資料になると考えたので収録した。

1. 「工合」の資金に関して

1938年8月、1人の技術者(注1)を連れて西北の宝鶏にやっと到着した時、私は毎月アレー氏から300元前後の経費を受けとることになっていた。宝鶏到着後、10月末までに仕事を始めた。11月になって、「工合」協会からやっと4万円が送り届けられたが、その月末までには、すでに20~30数社の「工合」が成立しており、10数社もまさに組織されようとしていた。合計約50社の「工合」が成立する運びとなっていたのである。「工合」が非常に速いスピードで組織されていくことを考えれば、「工合」運動は当時の一つの大衆運動であったと見なされよう。「工合」運動を援助してくれた人たちは、すべて過去に華北で合作社の活動を行っていた人々であった。西北にやってきた多くの東北大学の学生たちは、すべて無報酬で援助してくれた。私も「工合」に参加する前、1932年から37年までの6年間、華北で合作社の活動を行なったことがある。銀行界、民族資本家の中には、進歩的思想をもつ陝西省銀行の經理担当李維城(注2)や金城銀行総經理の周作民らがあり、当時の「工合」運動を大衆運動と見なし、また私の言うことを信じて、貸付をしてくれた。まず、5万円ずつ、両銀行で合計10万円を貸してくれた。39年、両銀行の「工合」に対する貸付総額は50万円を突破していた。

「工合」協会は、国民政府行政院から全国の「工合」に対して500万円の資金の交付を受けた。1939年以降、この資金を用いた。38年末までに、西北区にはわずかに4万円が支給されただけであったが、「工合」協会は国民政府に所属している。だが、実質的には、「工合」は政府に所属する以前、すでに活動を開始していた。私の考えでは、「工合」運動は社会運動であって、決して政府が行なったものではない。民族資本家もまた、「工合」運動に参加していた。私の知っている統計によれば、それ以後の「工合」は大体以下のとおりだ。

1942年、全国各地の「工合」、すなわち西北、東南、西南、浙皖、晋豫、辺区、雲南等の「工合」の総社数は、実に3000社に達していた。1938年、上海で発起した時には、3万社前後を組織する予定だったので、実際にはその10分の1を達成しただけであった。問題なのは、非常に多くの発展を阻む力があって、全民衆の運動とならなかったことである。「工合」には全部で72事務所があった。その上部機構としての大きな事務所、すなわち弁事処には西北、東南、西南、川康、雲南、浙皖、晋豫などがあり、各々いくつかの省、ある場合にはいくつかの県を管轄下に置いていた。晋豫区の洛陽弁事処は国民党統治区にあったが、ただ大部分、すなわち活動の重点は、山西省東南部の賀電の解放区に置かれていた。蘭谿の浙皖弁事処は新四軍地区にあり、主にこの地区で活動を行っていた。

正社員の総数は約3万人であったが、実際に「工合」に参加した者の数は2、3倍もあり、計8～10万人前後に達した。たとえば、われわれは軍用毛布を100万枚以上織ったが、縦糸は機械で紡いだ糸を用い、横糸には羊毛を使用した。羊毛から製造した糸は、農村婦人および傷兵が手で紡いだものである。参加した婦人は、四川省成都一帯の人々であった。このことから見ても、社員以外に参加した者がいかに多かったかがわかるであろう。資金面からいえば1941年から42年の間に社員自ら出した資金は600万元前後であった。ある者は「工合」に参加する際支払い、ある者は、「工合」組織後、賃金から差し引かれた。この時期、実際に使用された資金は、8000万元に達する。その一部は国民党から借りた金であった。しかし、1943年以降は、インフレのため、国民政府が発行している紙幣はあまり役に立たなくなった。

2. 「工合」運動に対する私見

「工合」運動は経済上の民主運動といえる。私とアレ一氏は、「工合」運動が当時一定の役割を果たしたと考えている。

(1)五四運動の流れをくみ、進歩的知識人、労働者と結びついた。進歩的知識人としては孫啓夢、章乃器、大公報の王芸生などがいる。その他、封建主義に反対し、女性を生産労働に参加させることで、女性解放の一端を担った。こうして「工合」には農民の参加があったばかりでなく、(社員の)5分の2が女性であった。このように、「工合」運動は五四運動の精神、民主精神を発揚した。

(2)抗日時期、「工合」運動には中国民衆のみならず、

国際的に多数の友人が参加し、支持してくれた。たとえば、イギリスには英中発展協会(Anglo—Chinese Development Society)と呼称されたイギリス「工合」推進委員会があり、そこにはアルフレット・バーンズとクリップス夫妻がいた。その他、フィリピン、アメリカなどからも支持があった(注3)。こうした事実から、この運動は国際的運動であったと言えるだろう。

(3)「工合」運動は中国の軍需品、民用品生産に大きく貢献した。当時、「工合」協会の理事長は孔祥熙であったが、「工合」は国民党のためだけに仕事をしたわけではない。たとえば、賀電の山西省東南部や葉挺の新四軍などを援助している。中日戦争(七七事変)後、英米は中国支持を明確にし、国民党に対してアメリカは1～2億ドル、イギリスは5000万ポンドを貸与し、さらに武器輸出も行なった。だが、共産党が抗戦続行の姿勢を堅持したのに対し、国民党はしばしば動揺した。この結果、英米は次第に解放区に着目するようになった。当時、「工合」運動を支持することは、抗日を支持することに等しかった。「工合」は軍需品、民用品を供給することによって、国民党を日本に降伏させないよう牽制することで、かなりの役割を果たした。

(4)「工合」は、解放後の人材等も提供した。「工合」は、解放後の中国合作事業の一層の発展を促す技術者、合作事業の幹部を含む経験と組織力を提供した。抗日時期、「工合」協会の理事長は孔祥熙であった。ただ、理事には各党派の人々がひとしく参加していた。国外の抗戦に同情的な愛国的華僑との関係もあったし、また西北区の延安事務所のように、「工合」は解放区での工作も行なった。孔は理事長のままであったが、1950年に彼の名を理事長からはずした。解放後の49年、われわれは臨時工作委員会を成立させ、「工合」協会の機構を依然として存続させた。全国的な合作社の組織が成立したので、従来の「工合」はすべてその全国的合作組織に組み込まれた。当時、それを中央合作事業管理局と称したが、北京以下各省、各市の合作社の責任者の多くは、もと「工合」の各クラスの幹部達であった。たとえば、中央合作事業管理局の局長の孟用潜(注4)は、私が西北区にいた時、山西省東南部の「工合」事務所の主任であり、後に晋豫区弁事処の主任になった人物である。副管理局長の于樹徳(注5)は昔、日本に留学し、また北京大学、燕京大学の教授であったが、ある時期「工合」協会の副総幹事でもあった。中央合作事業管理局の処局長クラスには、非常に多くの「工合」出身者がいた。手工業合作社、すなわ

ち各「工合」(注6)の幹部は、すべて中央合作事業管理局から派遣され、管理にきていたが、その幹部の多くは過去に「工合」の経験をもっている者であった。このように、「工合」は解放区および解放後の全国的な「工合」(手工業合作)運動の発展に多大な貢献をしたのである。

以上のことから、「工合」運動は中間の道ではないことが理解されるであろう。文化大革命の時期には、問題が非常に多かった。孔祥熙が理事長であったことから、ある人は「外国人アレーは反動だ」とか「スパイだ」とか非難した。まったくナンセンスな話だ。「工合」の役割は大体、以上述べたとおりである。

3. 国民政府との関係について

孔祥熙は「工合」協会の理事長であったが、理事には各方面の人物が網羅されていた。孔が理事長になることは、1938年8月に漢口で決定されたものだ。アレー氏は準備会の担当者であった。1938年4月、上海で発起した時、銀行家、華僑、友人等各界の人々が集まった(注7)。のちに漢口で国民政府の同意を得たが、もともとは民間の組織であった。なぜ、国民政府の同意を必要としたかといえ、抗戦期にあっては国民政府の支持がなければ、工作を発展させることができなかつたからだ。1938年夏、漢口で「工合」協会を成立させる時、各方面に参加を要請した。

抗戦初期、アレー氏はイギリス管轄下の上海工部局で働いていた。イギリス大使の支持(注8)もあり、アレー氏は本格的に「工合」運動に携わることになった。共産党関係者では、当時漢口にいた周恩来、王明、董必武が、「工合」運動を支持してくれた。その他、E・スノーや王雲五などのジャーナリストや浙江の民族資本家も、この運動を支持した。孔祥熙はあまり熱心でなかつたが、当時の状況からやむをえず支持することになった。これらの支持を背景に、協会設立のための仕事を開始した。アレー氏は調査のため、広西省や江西省などに赴いた。なお、38年末には全員が漢口から重慶に移った。

重慶でアレー氏と私は、小人数からなる「工合」協会の理事会をつくり、周恩来と相談して理事を決めた。国民党関係者からは、同党の中ではやや見識のある邵力子、張治中を、共産党からは当時重慶にいた鄧穎超、董必武、林祖涵を任命した。民主的人士としては、救国会派の沈鈞儒、中国職業教育会派の黄炎培。宗教関係者ではカトリックの于斌、プロテスタントの陳文淵などであった。

「工合」協会の特色を一言でいえば、それは国民党の行政組織ではなく、民衆組織であったことにある。その

協会の幹部を、私はアレー氏たちと相談の上、決定した。その結果、総幹事に章乃器を、副総幹事に杜重遠を任命しようとしたが、彼らはある事情で任につくことが不可能であった。たとえば、民主人士の杜重遠は上海救国会の人物であったが、彼は新疆にいっていた。新疆の盛世才のもとにいっただが、そこで盛に殺害された。また、七君子(注9)の1人の鄭韜奮を副総幹事にしようとしたが、『生活』雑誌を編集していて、蒋介石に嫌悪されていたため、それも実現できなかった。結局、総幹事には劉広沛、副総幹事には燕京大学の梁士純(注10)がなった。推進組の宣伝部長は沙千里(七君子の1人)、副組長に胡子嬰、これらの人々はすべて民主人士である。業務組は劉広沛が兼任した。財務組は楊子厚であった。楊はアメリカのベル会社と関係があり、同国で勉強した経験をもっていた。組織組は私、技術組は上海電力公司の林福裕であった。孔祥熙を除けば、国民党の主流は1人もいなかった、と言うことができる。理事の中には、共産黨員すらいたのだ。総務組組長は富清淮で、以前は北京のYMCAの総幹事であった。このように、「工合」協会は、当時の知識人、宗教人、愛国者で構成されていたのだ。

われわれは国民党地区でも活動できたし、また解放区でも活動できた。なぜならば、「工合」は党派ではなく、社会団体であったからだ。延安、山西省東南部、新四軍地区でも同じように活動した。そして、国民党地区や各区でもまた非常に活発であった。「工合」の作風は、国民党の作風とは異なっていた。たとえば、西北区のように、「工合」では皆、共同して労働し、知識青年と労働者が一緒に生活し、歌をうたい、学校を運営し、病院を経営し、十分に労働者の福利に気を配り、非常に活気に溢れていた。西北地方は特に落後していたので、小学校を運営すれば、子弟を学校に上げることができる。病人が多かつたので、病院を運営すれば、この地方の病人を看ることができる。「工合」運動は、新しい社会、新たな運動を代表しており、国民党の官僚的作風とはまったく異なっていたのだ。上海や重慶の数多くの青年は陝北、延安に行くことを願っていた。彼らは宝鶏をとおる際、当時の「工合」の潑刺たる様子を見て、宝鶏に留まった。活動に参加することは非常に容易であった。彼らはどんな仕事でもよくやった。陝西省の「工合」事務所の作風は、国民党のそれと違っていたのだ。そこで、反動右派の国民党は、「工合」の人員が親共的ではないかと疑っていた。その結果、後に「工合」はいくつかの困難に遭

遇することになる。「工合」のある人々は逮捕された。特に、1941年1月の新四軍事件(注11)以後、彼らは「工合」に対して理不尽に振るまうようになり「工合」には絶えず事件が発生するようになった。国民党は「工合」のどれもこれもが共産党ではないかと疑ったので、「工合」はあまり平穏に仕事を続けることができなくなった。私が当時を少し回想するだけでも、西北区では30余人が逮捕されている。その中の8、9人は婦人である。さらに1人が殺害された。その他の各区でもまた同様な状態であった。

あなたが質問した王朗は死んでいない。西北区の李華春は殺された。東南区でも1人殺害されたが、記憶が定かでない。浙皖区の水産「工合」事務所の龍良喜はきわめて立派な会計であったが、彼もまた国民党に殺害された。以上が私の知っていることである。さらに多くの人々が死んでいるに相違ない。王朗は、ある時期西南区の主任であった。離職後、ローマのFAOで仕事をしていたが、何年か前にそれもやめた。李華春は陝西省漢中県の「工合」事務所の主任であった。ついでながら、アメリカにある「工合」推進委員会の主席は、ヘンリー・カーペンター(Henry Carpenter)(注12)だ。

4. 私自身のことに関して

私は1938年から46年まで、ずっと「工合」協会西北弁事処の主任兼協会の組織組組長であった。42年は「工合」にとって非常に重要な1年であった。アレー氏は、この年すでに「工合」協会の技術顧問ではなく、解雇されていた。だが、彼はその後も西北に留まっていた。西北で大半を学校運営に集中しており、「工合」そのものに対してはあまり実際の活動をしなくなった。42年以前は、彼は各地で活動していたのだが、ただ蘭州と山丹だけで活動するようになった。41年8月、私は「工合」3周年記念事業として宝鶏で大会を開催し、きわめて盛大な内容を盛り込んで中国全区の代表を招集した。その際、国民党が私を捕えようとしたので、逃亡して重慶に向った。陝西省の国民党の蔣鼎文は私が軍用毛布製造に関して汚職したといい、裁判所に出頭するよう宝鶏の私に伝言してきたのだ。私は彼の陰謀を悟った。西安にいったら終わりだ。すぐに捕えられ、彼らの思うがままに処理されてしまう。アレー氏もまた、私が逃げた方がいいとの意見で、「祝賀会はわれわれが行なうから心配ない」と言った。私は逃げ延びられたけれども、まだ嫌疑をかけられた3人の「工合」幹部が残っていた。西安宿舍主任、弁事処視察員および連合社責任者は、国民党によって逮

捕され、監禁された。だが、私のところまでは捕えにくることができなかった。私は重慶で8カ月過した。当時の総幹事はアメリカ人のフィッチであった。孔祥熙と攪乱を好むCC団の間には矛盾が存在したので、私は重慶にいったのだ。孔は、まだ私に対して非常に好感をもっていてくれた。孔に会いにいった時、彼は私に蔣鼎文の電報をみせた。それには、「盧には汚職の嫌疑がある。西安に出頭させ、自首させるように」と書かれていた。私は孔に「どのようにすればよいのか」と尋ねた。孔は言った。「気にかける必要はない。あなたはここに留まってフィッチを援助しなさい。蔣鼎文はあなたのことをあまりよく知らないのだ」と。当時、太平洋戦争が勃発したばかりで、重慶には中国の財政、軍事を援助する外国の専門家、軍事要員が非常に多かった。そのため、「工合」は依然として非常に重視されていた。特に、西北区で製造する軍用毛布と部隊へのその供給は、重要な関係をもっていた。そこで、西北区の工作に触れて、アレー氏は私が西北に戻ることを希望した。結局、孔に蔣介石を動かして問題を解決することを求め、前に述べた3人の幹部を釈放してもらい、私も西北に帰れることになった。こうして矛盾が初めて解消したことを知った。

1942年以後の「工合」の情況は、私が西北に戻った後、また変化した。国共間の矛盾対立が39年、40年の時に比してきわめて悪化していたからだ。陝北や山西省東南部の事務所との関係も昔のようではなくなり、しばしば断絶するようになった。元来、外国からの献金は宝鶏から転送していた。41年に新四軍事件が発生してからは、以前のように転送することができなくなった。外国の献金は、多くの場合別な方法で延安に送るようになった。その頃、アレー氏は「工合」国際委員会の幹事になっていた。国際委員会と「工合」協会は別の組織である。孔祥熙は、国際委員会の献金を欲していた。孔は、思うがままにその資金を誰彼に支給する権限をもつことを願っていたのだ。だが、結局そうしたことは不可能であった。国際委員会は解放区の「工合」援助のため、各種の方式を採用した。たとえば、廖承志、康世恩等に内密で献金を援助支給する方法をとった。CC団は「工合」に打撃を加えようとしたが、「工合」をあえて破壊しようとはしなかった。その主な理由は、当時はなお抗戦期間中であり、42年、43年には「工合」を参観にくる国際人士が多かったからである。たとえば、アメリカの副大統領、大統領候補者、イギリス議会議長中国訪問団、英米の多くのジャーナリストがいた。これらの人々は西北を訪れ、「工

合」を参観した。だから、CC団は「工合」をそれ以上破壊することができなかつたのである。ただ、われわれは解放区の「工合」と直接連繫をとる手段がなくなつてしまった。

当時、非常に興味深い事実があつた。「工合」運輸隊は榆林から羊毛を運搬した。本来、辺区と国民党地区間の通行は許されなかつた。ただ、「工合」運輸隊だけは、通行時の妨害を受けなかつた。榆林に行くには、西安、洛川、延安を通過しなければならなかつた。国民党による封鎖線は、「工合」の証明書さえ持っていれば、通ることができた。「工合」の車は自由に往来することができたのだ。したがつて、われわれは延安事務所に西北弁事処の「公証」、すなわち身分証明書を与えた。抗戦期の旅行はすべてこうした証明書を保持する必要があつた。そこで、延安から出てくる人々は、「工合」の身分証明書さえ持っていれば、通行することができたのだ。

45年4月、私は西北を離れ、「工合」を代表して妻(注13)とイギリスに渡つた。イギリスにいった後、アメリカの委員会が来訪を要請してくれた。私は外国で1年過ごした。

46年6月、中国に帰つた。帰国後、「工合」の実務を離れ、善後救済総署(UNRRA?)に勤めた。「工合」では、なお顧問の地位にあつた。

47年、ジュネーブに行き、国際難民組織に50年まで勤務した。この中には「振恤庁」という部門があり、救済問題を管理、担当していた。私がその責任者であつた。そこで難民救済問題を担当していたのである。この仕事は、51年から国連難民高等弁務官事務所によって引き継がれた。主に、難民の救済復興の仕事であつた。

5. 「工合」の現在における有用性

「工合」は歴史だとみなされている。だが「工合」のやり方について最近アレー氏および「工合」に参加した友人諸氏と数回会つて、話合つた結果、「工合」の歴史に関する本を出すことは、現実的意義があると考えようになつた。なぜか? 今日、中国は社会主義国家ではあるが、まだ青年の就業問題が残されている。さらに、大規模工場は社会が要求するすべての商品の需要を満たせていない。そこで、大規模工場のほかに、さらに全人民所有制ではない集団所有制の小規模工場を提唱しなければならない。それは、都市と農村の双方で提唱されねばならない。われわれは結局、合作社方式を用いるのがよいと考えている。

人民公社は中国の新しい組織だ。経済組織であるばか

りでなく、行政組織でもある。過去においては農業生産を行なうことを主要任務としていた。現在、農工連合企業、すなわち農産物を加工し、連合経営で果物の加工を行なうことが、農村では活発になつてきている。人民公社も工場を組織している。製糸、製粉、果物加工など、あらゆる種類の農産物の加工を行なつていく。人民公社生産の食料、油類はこれを第1類というが、すべて政府に売り渡されている。重要な商品はいわゆる第2類商品というが、これらを輸出することは大切であり、国家計画に組み込まれている。ただ、計画を超過したもの、すなわち国家が買い上げる量以外のものは自己処理できるようになっている。また、最初から国家計画に載らない第3類商品がある。第3類商品が公社の生産物なら市場に持つていって売ることができ、自由にその他の単位と取引契約書に調印できる。国家が買い上げず、計画以外のものは、合作社も結局、自己販売できることになる。

供給拡大の問題がある。一つ一つの人民公社、生産大隊、生産隊および農民個人それぞれのレベルで副業をもつことができ、そのレベルで使用しないものや不要な食料を販売し、その際、依然として合作社方式が採られている。このことから、現在もなお合作社が意義があると言える。都市でも同様だ。国営商業、すなわち大百貨店が人々すべての需要に応じることが不可能だ。北京の食堂、茶館など飲食業が完全に大衆の需要を満たすことができず、国家計画を待っている状況だ。おそらく、商店や建物も社会計画を必要としているはずだが、すぐには社会の必要に適應するすべがないのだ。その他にも、社会が解決すべき問題として、青年の就業問題もある。必要な商品等の国家計画や建設を2、3年も後に延ばさねばならないというなら、合作社を組織すればよいのだ。合作社の人材は多い。退職した人々には技術がある。青年には技術がないのだから、年輩者と青年を結びつけ、食堂をつくるのもよいし、製靴工場を設けるのもよいし、衣服工場を設立するのもよい。当面、どのようなことをすればよいだろうか? 使用していない家屋の中をすぐに片づけ、何台かの裁縫機械を置けば、衣服を生産できる。中庭などでは家具を生産できる。合作社を組織して、国家銀行が貸付を行なえば、非常に多くの人々の就業に役立ち、市場の物資、商品を豊富にする一助となる。また、サービス業の増大を支援することにもなるのだ。

合作社は社会主義の範疇に属している。だが、国営工場、国営商業と異なり、合作社の場合、損失はそれに参加するすべての人の不利益となる。逆に、利潤があがれ

ば、参加者すべてにとって好都合だ。利潤が多いのは、国家にとっても損失ではない。徴税することが可能になる。したがって、合作社を組織すれば、経済発展をかなり早めることができる。抗日時期に、「工合」を組織したのは、後方に難民がおり、日用工業品も不足していたからだ。そこで、短期間に難民、労働者を組織した。こうして抗戦に甚大な貢献をしたのだが、同様に「工合」運動は現在でも有用である。

中国は大国である。土地は非常に大きく、人口も多い。私は今年73歳であるが、この年齢になるまで多くのことを経験してきた。大国にとって大規模工場、たとえば製鉄工場は当然必要だ。だが、わが国にとって、むしろ重要なのは小さな工場だ。私はスイスのアルプス山中で3年間過ごしたことがあるが、その時いつも、中国の青海省を思い起こしていた。青海も山地、高原であるが、スイスと比べると何倍も広い。そして青海は半年以上冬である。農民は何をしたらよいだろうか。

ところで、スイスの時計は、どのように生産されるか知っていますか？大工場が時計の部分品を製造し、ジュネーブ等の民衆が合作社を組織して、その部分品を買っていく。たとえば、オメガなども、同様に家内工業で分散的に製造される。こうして、自己の苗字を時計の名称として書き入れる。優秀な時計は、年に数えられるほどしか生産されない。青海もまたこのようにすることができる。各地でこのようにすれば、非常に多くの物を生産して、国家を援助することができるはずだ。

大工場と小工場、集中と分散、都市と農村をよく調整し、協力させることは必要だ。そのために、合作社方式を用いることはきわめて大切だ。周知のように、わが国の工場には重大な欠陥がある。労働時間、労働の質、仕事量を問わず、ひとしく労働賃金を得ている。合作社はこれらの問題をすべて解決できる。私もまた合作社の生産と指導に関して、いつもこの種の問題を論じている。この方面で多くの研究がなされることを希望している。

盧広綿氏に対する質問

—重慶政府は、1941年以降の「工合」に対する弾圧過程で、重税等による圧迫をかけなかったのでしょうか。

重税による圧迫はなかった。国民政府による破壊、擾乱の一つとして、政府は工場設立の際義務づけられている登記を許さなくなった。42年以降、国民党地区の「工

合」は、38、39年のような発展の手段を失った。それには、いくつかの原因がある。(1)国民党の破壊工作によって、青年たちが「工合」を離れて解放区に去った。その結果、「工合」の人事がきわめて不安定になった。(2)貨幣価値の下落により、生産では利益が得られなくなり、買い占めの方が儲けが大きくなった。綿布を生産するより、綿糸を買い占め、機会をみて売った方が金になるという状況であった。日に日に貨幣価値が暴落し「工合」は十分生産を行なえなくなった。(3)その上、国民党はいままでとは違うやり方で、壮丁を徴発するようになった。「工合」にきて青年を見つけると、徴発するようになったのだ。徴発されないためには、いくらかの金を支払わねばならなかった。以上の方法で国民政府は増税せずとも「工合」を破壊しえたのである。

—梁漱溟の郷村建設運動の中の農村工業樹立の考え方に、いかなる評価を与えますか。

梁漱溟はもと北京大学哲学系教授であった。彼は多年、中国を救う方法を考えていた。中日戦争勃発前後、そうした思想を次第に郷村建設に集中した。そこで山東にいき、郷村建設学院を運営し、合作社を組織してデンマークの農民学校に酷似した農民学校を経営し、哲学思想を農民に注入しようとしたのである。

スノーは梁と私の関係を文章に書いたことがある。梁は学者で思想家であった。梁が北京大学教授であった当時、私もその学生で彼の影響を受けた。ただ、彼の考えには問題があった。たとえば、農村には尖鋭な階級闘争はなく、地主と農民の区別はないと主張していた。したがって、農村の問題は教育で解決でき、民主主義が実現できると考えていたのだ。毛沢東は彼を批判したが、なお彼を友人と考えていた。ゆえに梁は結局、政治協商委員に就任したのだ。彼の思想には問題があったが、しかし、私は彼がいくつかの面で正しかったと思っている。中国の現代化は、なお中国独自の路線を歩まねばならない。こうした観点からすれば、彼の思想は少なからず利益をもたらす可能性がある。

盧広綿氏からの返信

以下は、私が帰国後出した札状に対する返事の抜粋である。その後、ふたたび手紙を書いてさらにいくつかの質問を行なったが、それに対する返事もいただいた。その内容の一部は(注2)および(注7)で利用したが、その他については別に機会を得て公表したい。

私は1929年春、日本を訪問した。当時、私は東京で大山郁夫氏を訪問し、また大阪、神戸で賀川豊彦氏の招待を受け、大阪市の労働者福利運動を参観した。私は1928～29年、瀋陽のYMCAで仕事をしていて、瀋陽師範専攻科教授で、国際的にも有名な日本の植物学者大賀一郎氏と知り合った。また、私は1930～32年のスコットランド留学中、朝海浩一郎氏と知り合ったが、後に彼が駐米大使等々を歴任したという話を聞いたことがある。要するに、私の青年時代はわれわれ両国関係は緊張していたが、同時に私は日中両国人民が深い歴史的文化的関係を有しており、永遠の友好を樹立するために理解し合うべきだ、とずっと信じてきた。(中略)

中国は当面、四つの現代化に力を注いでいる。この過程で全人民所有制の国営企業を大いに発展させるとともに、広範な集団所有制企業を組織し、それには合作社方式を採用することが必要である。私と私の友人たちは皆、合作事業が(中国の経済建設に)貢献する力があると考えている。また、合作社組織は、経済の発展に対して積極的役割を担えるのみならず、民主的な生活慣習をはぐくみ、人民の友愛互助と社会主義的美徳を発揚することに対して、きわめて重要な影響を及ぼすものと確信している。(1979年10月31日)

(注1) 呉去非のこと(Buck, Pearl, "Free China Gets to Work," *Asia* (April 1939), p. 200, 参照)。彼もまた、ベイリーの弟子の1人である。アメリカのミンガン大学卒業後、フォード自動車会社で実地訓練を受けた。帰国後、「工合」運動開始以前は上海電力会社の技術者として働いていた。「工合」協会の技術組副組長である。

(注2) 盧広綿氏からの第二信(1980年2月18日)は、李維城はどのような人物かという私の質問に対して、以下のように答えている。

「李維城は湖南省出身の人物で、程潜が湖南省主席の時、李は湖南省銀行の經理であった。西安事件前、程潜が西安行営兼陝西省主席になった時、李もまた程潜に随行して陝西に行き、陝西省銀行の經理となった。李は進歩的銀行家で、西安事件の時には張学良の東北軍、楊虎城の西北軍と共産党との間の団結工作を行なった。1938年、私が陝西で『工合』の工作を繰り広げた時、李は『工合』に積極的支持を与えてくれた。私は宝鶏に着くと同時に、陝西省銀行宝鶏支店に行った。『工合』運動の開始時期、資金が逼迫していたからだ。李はすでに『工合』に対する貸付に賛成してくれてい

た。李維城は解放後ずっと人民銀行本店の顧問であったが、1977年死去した。」

(注3) その他、フランス、ジャワ、インド、ビルマ、オーストラリア等の団体や個人からの支援を受けている。

(注4) 孟用潜は1949年10月政務院財政経済委員会委員、同委員会中央合作事業管理局局長。ついで50年7月中華全国合作社連合社臨時理事会の主任に就任。54年10月全国購販合作総社理事会副主任となる(霞山『現代中国人名辞典』1966年版参照)。

(注5) 于樹徳は河北省豊潤県生れ。京都大学経済学部留学。1922年共産党に入党。24年国民党中央執行委員会北方執行部の責任者。27年国共分裂後、共産党を脱党した。49年10月中央合作事業管理局副局長。54年7月中華全国購販合作総社監事会副主任となる(同上書参照)。

(注6) 「工合」協会管轄下の「工合」ばかりでなく、工業の合作社全般をアレー氏、盧氏ともに、「工合」(Gung Ho)という言い方をし、翻訳の際混乱した。特に、辺区の「工業生産合作社」、解放後の「手工業生産合作社」にこうした表現を使用する。このことは、両氏がこれらの合作社も「工合」と本質的に同一の性格を有していると考えている証左であろう。

(注7) 上海では、38年4月に「中国工業合作促進委員会」が設立された。浙江興業銀行総經理の徐新六が、同委員会の主席に選ばれ、また、「中国工業合作社組織計画案」が作成された(日本興業銀行調査部『現代支那に於ける合作社の意義と特質』1942年 95ページ)。

上海の錦江飯店における同委員会の設立会議の参加者について、N・ウェールズ(東亜研究所訳 前掲書54ページ)は徐新六、盧広綿、レウィ・アレー、E・スノー、N・ウェールズ以外に、日本のテロ防止のため公表できない中国人が含まれていたと述べている。盧氏は私宛の1980年2月18日付書簡で、出版界の胡愈之、新聞界の梁士純と王芸生、銀行界の胡玉琪、婦女界の王国秀と王立明、華僑の肖宗俊、海関総稅務司の丁貴堂が参加していたことを明らかにした。

(注8) イギリス大使はA・クラーク・カー(Archibald Clark-Kerr)である。

(注9) 七君子とは、1935年8月に共産党が出した八・一宣言に呼応して、国共対立の停止、抗日民族統一戦線の結成を主張した全国各界救国連合会の七人の

幹部、すなわち弁護士沈鈞儒、沙千里、史良、大学教授の王造時、著名なジャーナリスト鄧翰喬、民主教育者李公樸、民族資本で経済評論家の章乃器らをいう。36年11月彼らは反日ストライキと人民戦線の扇動という罪名で、国民政府に逮捕された。これを七君子事件という。

(注10) 梁士純は1903年江西省南昌で生れた。ペイリーの弟子の1人。1916年アメリカのウィリアム・ナスト大学入学。その後、フォード自動車会社で技術訓練を受けたが、ジャーナリストに転じ、28年までデトロイト新聞で働いた。その後、帰国して燕京大学新聞部長となる。また、YMCA 全国委員会総務理事でもあった。中日戦争勃発後、上海に赴き、抗日諸団体結集のために活動したが、同時に「工合」協会創設にも多大の貢献をした。現在、南京大学外文系英語科教授である。

(注11) 1941年1月に発生した新四軍事件は、別名皖南事件とも称されている。新四軍は華中地区で活動した共産軍の略称で、正式には国民革命軍新編第四軍とよぶ。その作戦地域は揚子江中下流一帯で、日本軍占領区と国民政府軍の中間に位置し、厳しい環境にあったにもかかわらず増大し続け、40年末には10万の兵力を有するに至った。これを敵視した国民政府軍は翌年1月、陰謀をめぐらして突如新四軍を襲撃し、軍長葉挺は捕虜、副軍長項英は戦死、計9000人の将兵が犠牲となった。そしてこれが国共再分裂の契機となった。

(注12) ヘンリー・カーペンターは、『新華日報』(1942年10月2日)の記事によると、「工合」運動の

視察を兼ねて、「工合」に対するアメリカの援助を相談に訪中し、孔祥熙たちと会見したという。なお、アメリカにある「工合」推進委員会の名誉主席は、エレノア・ルーズベルトであり、主席にはヘンリー・カーペンターとともに、ハリー・ヤーネル(Harry Yarnell)海軍大將がなっていた。

(注13) 盧広綿夫人の姜漱寰は西北区婦女部主任であった。著書に『工合運動在西北』(1940年6月)中国工業合作協会西北弁事処出版があり、この本は西北区の製紙「工合」と印刷「工合」によって製本された。私はこの本を盧氏から借りて、その1部を筆写する幸運に恵まれた。

〔付記〕 本会見を実現するに当たり、西園寺一晃氏には並なみならぬお世話を受けた。西園寺氏は北京在住の少年、青年時代、アレー氏と同じ建物に住んでおり、とりわけ親交も深かった。西園寺氏の紹介状を郵送していたので、アレー氏は笑顔で私との面談に応じてくれた。このように、アレー氏との面談の成功は、ひとえに西園寺氏のおかげである。また、幼方直吉先生、奥崎裕司先生にも大変お世話になった。その他、北京では潘金声先生、大久保隆郎先生、伊藤和夫君(筑波大学大学院)の御協力をえており、帰国後のテープ翻訳は陳明台(筑波大学大学院)、クリスチャン・ダニエル(東京大学大学院)両君の援助を受けている。謹んで謝意を表したい。なお、文責はすべて私にある。

(筑波大学大学院博士課程)